

言葉と批評

——H・M・エンツェンスベルガー

の『シュピーゲル』論——

青木 順三

「意識産業」関係のテーマを論じたエンツェンスベルガーの論文の中で、その総論に当たる『意識産業論』(1962)¹⁾を除けば、フランクフルター・アルゲマイネ紙を論じたエッセイの資料分析の緻密さや犀利さもみごとであるとはいえ、やはり『シュピーゲルの言葉』が、いかにもこの著者らしい特色の発揮された、生彩に富んだ評論といえるであろう。ハンス・マイヤーが編集した評論集『20世紀ドイツの文学評論』の下巻(1972)に、このシュピーゲル論が採録されているが、このことは、エンツェンスベルガーにとって名誉であるのか、あるいはハンス・マイヤーの炯眼を証するものであるかはともかくとして、少なくともこの論文の質について何かを物語るものではあるだろう。

ところで、この論文が、このように単なる週刊誌ジャーナリズムの批判にとどまらず、文学的魅力をも備えたエッセイになっているのは、元来詩人である著者が、その本来の領域である言葉を論議の中心に据えているところに、その理由の大きな部分があるように、私には思われる。すなわち、エンツェンスベルガーは、この論文の中で、何ら未知なものを改めて提示したり、隠されていた新しい事実を暴露してみせたりしているわけではない。彼は単に、現に書かれ、印刷されている文章のテキストを精細に検討して、暗示やほのめ

かし、また微妙な文章のあや(後で詳述するように、雑誌『シュピーゲル』の場合、これがかかなり多用されている)の意味するところ、そこに隠されている含意や、記述者の本心を読みとり、それを指摘しているだけなのである。だから、彼はけっして「悪意ある読者」ではなく、「精確な読者」であるにすぎない。にもかかわらず、それが、同時に、意識産業が読者大衆の意識を操作し誘導するプロセスを剔抉して見せることになっているところに、この論文のおもしろさがある。そして、それは、なによりもまず、エンツェンスベルガーの、言葉に対する鋭敏な感覚が彼の批判を支えているから、いやむしろ、その批判の出発点になっているから、なのである。「些事の中に神様がひそんでいる」(Der liebe Gott steckt im Detail)²⁾というモットーは、たしかに、いたずらに掲げられているのではないし、彼の処女評論集が『細目』と題されているのも、十分うなずけることである。

R・バウムガルトは、時代批評という分野において発言する権限を、人はそもそもどこから手に入れることができるのか、つまり、この分野における専門家の資格を持つのはどういう人物なのか、という問題を設定したのち、エンツェンスベルガーの場合について、次のように答えている。つまり、それは、社会学や経済学を専攻したという卒業証書でも

なく、政党への所属ということでもなく、どこかの政党機関紙の編集にたずさわっているということでもない。「正しい答は、この場合、パラドクシカルなものである。エンツェンスベルガーには（時代批評をする）権限がある。彼は抒情詩人なのだから」³⁾というのである。最高度に活発な、生き生きとした知性と、それにもかかわらず失われていない無垢な心、普通ならとうに慣れきってしまっているような日常的な事実にもあらためて驚愕し、痛みを感じうる能力、並外れた傷つきやすさ、それが抒情的気質であって、エンツェンスベルガーの時代批評において怒りを発し、筆を進めさせているのは、まさにこうした抒情的気質なのだとするバウムガルトの指摘は、正鵠を得たものである。

以下のノートでは、『シュビーゲル』の言葉の論点を私なりに整理しながら、特にエンツェンスベルガーがこの論文の標題に掲げた言葉の批判としての面を探っておきたい。

エンツェンスベルガーは、まず、世におこなわれている社会批評には共通の先入観があって、自分が批判する対象の仮面を何としてでも剥ぎ取らなければならないという偏執狂的な観念にとりつかれて苦しみながら、しかもこの対象がまるで魔力を持った怪物のような存在であって、その本質を見抜くことなどできるものではないかのように思い込んでいる、というイロニーッシュな言葉でこの論文を書き始めている。そして、『シュビーゲル』誌の場合、その所有関係や財政事情、それに編集者の顔ぶれやその個性、見解などはきわめて明白であり、「背後関係」を洗うことによってこの雑誌の傾向や意図を暴露しようとしても徒労に終わるとする。つまり、この雑誌の秘密はどこにも隠されているわけではなく、誰でも目につくところにある。「この雑誌の

性格をみずから最も鮮明にきわだたせているものは、そこに使用されている言葉である」という。そして、これに続いて、いかにも典型的なシュビーゲル調の文章で書かれた二つの記事を引用する。一つはディラン・トマスの生涯を扱ったものであり、第二の記事の主人公であるYという仮名の人物は、すぐに続いている種明かしの中で明らかにされているようにゲートである。つまり、第二の記事はエンツェンスベルガーの模写であり、彼一流の機知であって、思わず読者の苦笑をさそわずにおかない。しかし、彼は、ここで戯文の才を誇示しているのではない。この「実験」は、この雑誌の隠語^{ジヤルゴン}で書くと、どんな対象もすべて特色を失い、見分けがつかなくなることを示すためにほかならない。続いて彼はこう書いている。

「シュビーゲルの文体 (Stil) という言い方は誤りであろう。文体というものは、相手を選ぶ。それは、どんなに異なったものにでも好き勝手に適用できるものではない。文体は、それを書く人と切り離せない。ところが、『シュビーゲル』の言葉 (Sprache) は、匿名である。それは集団の産物である。それは、書かれたものを覆い隠してしまうのみならず、その書き手をも覆い隠す。それは、悪しき普遍性を持った言葉である。シュビーゲルの言葉は、どんな場合にも、自分はふさわしくないと思うことがない。原始キリスト教からロックンロールまで、文学からカルテル法まで、麻薬騒動からミノス芸術にいたるまで、ありとあらゆるものを、それは千篇一律に片づけてしまうのである……。」⁴⁾

こうした独特の言葉が使われる根拠は、『シュビーゲル』自身が主張するところによれば、編集方針として、あらゆるニュースを

ごく普通の平均的読者でも理解できる言葉に翻訳しなければならないと考えているところからくるとされている。このような論拠は、日本の新聞雑誌でもよく聞かされるものだが、エンツェンスベルガーは、これに対して、『シュピーゲル』がまずこの世に現われて、はじめて『シュピーゲル』の読者が存在するようになるのであって、その逆ではないというアイロニーでこれに応酬する。つまり、雑誌は、自分が存在していくための土台として、読者を生産するのである。投書欄を見ればわかるように、読者は編集部の期待する読者像を受け入れ、『シュピーゲル』の言葉をやすやすと学びとってさえいる。それは、この言葉が、それを書く人間とも、書かれる事柄とも、何の関係もないからできることなのだ、とする。——この指摘は、文体でなく言葉であるという前記の引用内容とも関連するが、「文体とは、個性的なものと事物的なものととの結婚である」というトーマス・マンの言葉を想起させるものがあり、対象に真剣に関与することなしに書かれる軽薄なジャーナリズムの文章の底の浅さを捉えた、興味深い指摘である。

さて、エンツェンスベルガーは、この雑誌が「ドイツのニュース誌」と自称しているにもかかわらず、表看板である「簡潔な報道」に誌面で出会うことはめったになく、その代りに最も多用されている伝達形式が「ストーリー」であることを述べたあとで、このきわめて特徴的な、ストーリーという形式の特質を解明する。

彼によれば、ストーリーという形式は、そもそも本質的に事実の客観的で正確な報道とは相容れないものである。『シュピーゲル』がその大規模で有能な通信網を駆使して蒐集した情報は、すべて細かく切りきざまれ、「ある同質量の情報片に分解され」、それが読者の労力を省くためにストーリーに総合される

わけであるが、この総合の過程に、じつは目につきにくいまやかしがある。ストーリーにとって、客観的な正確さはそもそも問題になりえず、ストーリーの出来ばえにとって決定的なものは、その効果でしかない。つまり、ストーリーには、ニュースとなる事件の具体的内容のいかんにかかわらず、かならず発端と結末がなければならず、物語としての筋が必要であり、とりわけ、ヒーローが必要である⁵⁾。このことから、ストーリーは、どうしても偽似芸術的なこしらえものにならざるをえない。言葉をかえていえば、それは「退化した叙事的形式であり、ありもしない筋や関連性や美的連続性をでっちあげ」ざるをえない。ストーリーの筆者は、一方では簡潔で正確な事実の報道には背を向けているし、他方では真の物語が持つより高度な真実に近づくこともできない。だから、彼は、この両極の間に立って、自分自身を欺きとおすほかないことになる。こうして生じるものが、事実の報道でもなければ文学的フィクションでもない、エンツェンスベルガーのいわゆる「偽似芸術的こしらえもの」ということになる。事実を解釈し、整理し、飾りつけ、配列しなければならないにもかかわらず、彼はこの点を認めるわけにはいかず、自分が書くものの主観性や信念やアングージュマンを正面に押し出すことができないのである。これはまさに絶望的な立場であって、この立場を守るために、ストーリーの筆者は、どうしても事実を修正し、行間に語らせるほかなくなる。こうして『シュピーゲル』独特の暗示、ほのめかしといった手段が繰り返し用いられることになるのである。

エンツェンスベルガーは、このように論じたあとで、世に一応の定評となっている『シュピーゲル』のいわゆる批判的姿勢なるものの実態が、じつは真の批判ではなく、単なる

ポーズでしかないことを、それもその言葉遣いの問題にふれながら指摘している。この雑誌の特集記事の主人公に付せられる与格の定冠詞は、ドイツの法廷で被告の名に冠せられるならわしのものと同じであり、これは真の批判能力の欠如を審問官的ポーズで埋め合わせているのだ、という。『シュビーゲル』に何かある信念があり、展望と方向性と、変革への意志があるかのように考え、これを探ってみても無駄であり、それぞれの記事においてある立場をとっているかに見えても、それはストーリーを書くための必要に従っているにすぎず、二、三週間ののちには、別のストーリーの要求に合わせて、別の立場がとられる。『シュビーゲル』のイデオロギーは、自分以外のすべてを疑うという、懐疑的知ったかぶり以外の何物でもない。」だから「自分自身に対しては停止してしまうような懐疑、現実には存在しないこうした支点のほかに、何の手がかりも持たないような批判は、常に出来事の下婢になりさがるであろう⁶⁾」ということになる。

ところで、このような似而非批判的な記事の筆者が想定する模範的な読者とは、歴史の流れについての全体的展望を持たず、その時時のストーリーに描かれた世界の虚像を追いかけるだけの人びとである。しかも、こうした読者は、自分ではどんなことでも理解できし、判断できるという自負を持ち、この雑誌が提供する「鍵穴覗きの位置」に坐って、自分とは何の関係もなく、味方する必要もなければ、そもそも影響を与えることもできない別世界の惨めな劣悪な状態を、まったく責任を免れた立場で、毎週一回覗き見る。つまり、エンツェンスベルガーの用語で言えば、「報道が、自分の行動の方向づけに役立つ確かな手段であり、その限りでは生産手段であるのに対して、ストーリーは純然たる消費材

以外のものではない⁷⁾」ということになる。

エンツェンスベルガーは、以上のような基本的考えに立って、この論文の最後で、一例として、1956年12月、ハンガリー暴動の数カ月後に『シュビーゲル』に載ったサルトルに関する特集記事を詳細に分析してみせている。本年(1973)2月の『シュビーゲル』によると、この雑誌がサルトルを特集記事としてとりあげたことが二回(この二回の記事が、エンツェンスベルガーの検討の対象となったものである)あるほか、記録によれば、五百回以上も話題にされ、対談やインタビュー、また直接に執筆者として登場したことも、前後二十回にのぼるという⁸⁾。この数字だけから見ても、『シュビーゲル』のサルトルに対する関心の深さがわかるし、それだけに、この雑誌特有の隠語による誹謗のいわば手口がいかにも典型的に読みとれる。したがって、エンツェンスベルガーがこの記事を実例に選んだことは、けっして単なる偶然ではなく、むしろ恰好の対象を選んだことになるだろう。

このケース・スタディにおいても、エンツェンスベルガーの関心は、やはり主として言葉にある。たとえば、サルトルとフランス共産党との関係を表現するのに、使われている「あやしげな」、「曖昧な」、「にぎった」という類の形容詞は、はっきりした根拠もなく読者の感情をある方向へ誘導していくものであり、また「からかい合う」とか「いちゃつき」という言葉は、厳しい思想的対決を「猥談の水準に引きずりおろす」ものだという指摘などはその一例である。さらに、宗教的偏見を脱したつもりでいるインテリ読者の自意識を利用するために、イエズイット教団の用語が使われているという指摘や、引用符の不当な乱用に対する批判なども、いずれもきわめて的確に、記事の筆者の隠れた意図を見抜いている。

綜じて言えば、ここには、『シュビーゲル』の文章のいわば「不潔さ」に対するなかば生理的とも言えるような反撥と憤りがまざるように、私には感じられるし、あるいは、この反撥と憤りこそ、彼がこのエッセイを書いた原初の動機であるとさえ言うてよいかもしれない。そして、さらに一步を進めて言えば、そのもう一つ根元のところに、エンツェンスベルガーがサルトルに対して抱いている共感ないし敬意があるとは言えないだろうか。これが、エンツェンスベルガーが、ケース・スタディの対象としてサルトルに関する記事を選んだことの、第二の、そしておそらくは真の動機があると推定してもよいように、私には思われるのである。

エンツェンスベルガーは、『シュビーゲル』の記事をこのように検討した結果、次の四項の結論に到達する。「1.『シュビーゲル』の言葉は、それが語る事柄を覆い隠して曖昧にする。2. この『ドイツのニュース誌』は、決してニュース誌ではない。3.『シュビーゲル』がおこなっていることは批判ではなく、そのまがいものである。4.『シュビーゲル』の読者は、指針を得るのではなく、まどわされる。」⁹⁾そして、これに、第五のテーゼとして、「『シュビーゲル』は、これに代わる批判の機関がドイツ連邦共和国に存在しない以上、なくてはならないものである」という項目をつけ加えてもよい、と言う。この言葉は、一見『シュビーゲル』を賞讃しているかのように聞こえる命題であるが、じつはきわめて手厳しい著者のアイロニーである。『シュビーゲル』は、批判の公的機関として持っている強大な力を、真の批判のためではなく、何百万人もの人びとの意見を改悪するために乱用している。しかも、そういう機関がなくてはならぬものだという確認をすることは、もうほとんど破産宣告に等しい断定をしているこ

となのである。「この確認は、一週刊誌について語られるあらゆることよりもはるかに大きな射程を持つ。なぜなら、そもそも、それはもはや『シュビーゲル』ではなく、われわれの国の内部状況の全体にかかわることだからである。どの国民もそれぞれ自分にふさわしい新聞を持つ、とかつてある有名なアメリカ人は言ったが、これにつけ加えて、どの国民も、それぞれ自分が必要とする新聞にふさわしいものだ、と言うこともできよう。われわれが『シュビーゲル』のようなタイプの雑誌を必要とするということは、……この雑誌にとって有利な証拠になるものではない。それは、全体として、われわれの新聞に対する反証であり、そもそも、われわれの社会の状態に対する反証であり、つまり、一言で言えば、われわれに対する反証なのである」¹⁰⁾——こうした手厳しい自己批判をもって、エンツェンスベルガーはこのエッセイを結んでいる。

彼は、民主主義の持つさまざまな可能性というものは、そもそも行使してはじめて実現しうるものであること、しかも批判の自由の限界は、批判する側が決定するのではなく、支配権力の側が、戦術的観点に立って許容範囲を認めるのだということを、補論1の中で強調している¹¹⁾。そして、批判が目差すものは、改良であって、革命ではないことも。ここに示されている見解は、『意識産業論』の中で展開されているものであるが、エンツェンスベルガーが真のジャーナリズムとして、どのようなものを期待しているかが、かなり明瞭に示されていると言ってよい。すなわち、それは、自己の置かれた立場の微妙さを十分に認識した上で、常に醒めた心と、しかも老獪な知恵とをもって、自己の活動の可能性を一步步つ拡大し、現存する体制の真の変革に寄与することのできる批判を提起するような

ジャーナリズムということになるだろう。

ハンス=アルベルト・ヴァルターは、『細目』を論じた文章の中で、次のように書いている。すなわち、エンツェンスベルガーの最大の強み、最大の才能は、言葉にある。それも、言葉を分析し、解剖して定義するという面と、言葉を形成するという面との両面においてである。しかし、この言葉の才能は、恵まれた資質であると同時に陥穽でもある。言葉の選び方、使い方から意識誘導の方法をえぐり出す手さばきはじつにあざやかであり、また、その表現も適切で、光彩陸離たるものがある。しかし、「彼は、言葉のすみずみにいたるまで明快な表現法を身につけているために、時に不明確な問題にかかわる場合には、もはや完全に真実であるとは言えなくなってしまう場合がある。表現の才が、せっかく獲得した洞察から、エンツェンスベルガーをまた引き離してしまうのである。」¹²⁾ヴァルターによれば、これは彼が詩人であることにもよる、として、詩人エンツェンスベルガーと社会批評家エンツェンスベルガーとの間に緊張関係があることを指摘している。ヴァルターは、続いて、批判的な言葉分析、あるいは言語批判だけでは、社会的状況の全体を把握するにはやはり十分ではないことを主張している。私は、この説にかならずしも反対ではなく、むしろ原則的にはその正当性を認めるのだが、しかし、この『『シュピーゲル』の言葉』に限って言えば、詩人と社会批評家という二面の緊張関係の中で、言葉の分析的批判の成果が、その限界ぎりぎりのところでみごとに実った例であり、このエッセイの魅力もそこにあると考えるのである。

注

1. 『意識産業論』については、拙論「H・

M・エンツェンスベルガーの『意識産業論』（一橋論叢第六十一巻二号）を参照されたい。

2. H. M. Enzensberger: Einzelheiten. Frankfurt a. M. 1962 S. 355.

3. Reinhard Baumgart: Enzensberger kämpft mit Einzelheiten. in „Über Hans Magnus Enzensberger“ Frankfurt a. M. 1970 S. 131.

4. H. M. Enzensberger: Einzelheiten I. Frankfurt a. M. 1964 (edition suhrkamp) S. 80 f.

5. こうした特徴のために、ストーリーが依拠する世界観は民主主義の原理とは相容れぬものであり、むしろナチス時代の指導者原理に近いという指摘を、エンツェンスベルガーはここでおこなっている。この点については、注1で挙げた拙論を参照されたい。

6. ibd. S. 90 f.

7. ibd. S. 93 f.

8. „Spiegel“ 1973年2月12日号 S. 3.

9. ibd. S. 100.

10. ibd. S. 101.

11. この点については、注1で挙げた拙論を参照されたい。この補論1は、『意識産業論』全体への補論ともいうべき重要な内容を含んでいる。

12. Hans-Albert Walter: Was zutage liegt, und was nicht. in „Über Hans Magnus Enzensberger“ S. 151.